

日本英文学会 中国四国支部 第74回大会 プログラム・梗概

会期：2022年10月22日（土）

会場：オンライン開催（Zoom 使用）

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東6-13-1
安田女子大学文学部英語英米文学科 島克也研究室内
TEL 080-4887-6608

第74回支部大会は、Zoomを用いてオンラインで10月22日(土)のみ開催いたします。
第1室から第4室までの入室方法およびアドレスは、開催日までにEメールにてご連絡いたします。詳細は日本英文学会中国四国支部のホームページをご覧ください。

開会式 (9:50-10:00 第1室)

開会の辞 (司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長 島 克 也
日本英文学会中国四国支部支部長 今 林 修

研究発表 (10:00-12:20)

第1発表 10:00-10:40 第2発表 10:50-11:30 第3発表 11:40-12:20

第1室

1. チョーサーの語彙の多用途検索ツールについて — “A Chaucer Lexicon” の紹介 —
(司会) 広島大学教授 大野 英 志
呉工業高等専門学校助教 周 躍
(司会) 大分大学准教授 佐々木 朱 美
2. 『パミラ』における発話と思考の提示法について
広島大学大学院人間社会科学科博士課程後期 門 永 望
3. *Jacob's Room* における意識の流れ技法の文体的転換の特徴：
不定代名詞 one と引用符の使用に関する一考察
島根大学特任講師 浅 香 加奈子

第2室

1. 老水夫に架かる虹 —コウルリッジの「老水夫行」における海蛇
(司会) 和歌山大学教授 今 村 隆 男
徳島文理大学専任講師 金 澤 朋 紀
(司会) 防衛医科大学講師 矢 口 朱 美
2. ノスタルジアの世界 —Katherine Mansfield の *The Aloe*
高知大学教授 宗 洋
(司会) 広島大学教授 吉 中 孝 志
3. (招待発表) 「装飾農園」の継承とロマン派
和歌山大学教授 今 村 隆 男

第3室

1. キャサリン・バークリーの死因検証 — 『武器よさらば』における法の問題—
(司会) 広島女学院大学准教授 戸 田 慧
広島大学大学院生 森 兼 寛 登

(司会) 大阪学院大学教授 山 口 修

2. ミステリアス・ギャツビー

— 『グレート・ギャツビー』におけるギャツビーの身体的特徴の欠如—

広島商船高等専門学校講師 池 田 幸 恵

3. コーマック・マッカーシーとウィリアム・フォークナー

— 『ブラッド・メリディアン』におけるアメリカ南部の人種差別的暴力の越境

広島大学教授 大 地 真 介

第4室

(司会) 広島大学教授 小 野 章

1. 進行形に投影される含意構造と世界像 —「表象」と「アレンジメント」の言語ゲーム—

秀明大学教授 久 部 和 彦

2. 批判的視点から「異文化理解」を捉え直す

大島商船高等専門学校助教 中 原 瑞 公

3. (招待発表) 日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の側頭葉近辺の賦活状況：

英語説明文読解と日本語詩読解との比較を通して

広島大学准教授 西 原 貴 之

シンポジウム (13:00-16:00 第1室)

題目： デジタル時代の英語英米文学研究と英語教育

— デジタル・ヒューマニティーズの有用性と可能性を考える

(モデレーター) 広島大学教授 今 林 修

デジタル時代の日本語文化圏の人文学が英文学に期待すること

(講師) 一般財団法人人文情報学研究所主席研究員 永 崎 研 宣

Zora Neale Hurston が音声認識 AI 技術をつくったら？

(講師) シンガポール工科大学助教 横 山 説 子

ユーザ視点のデジタル・ヒューマニティーズ— 研究、教育、アウトリーチ

(講師) 武蔵大学准教授 北 村 紗 衣

確率論的トピックモデリングによる British classic fiction の「遠読」

(講師) 大阪大学教授 田 畑 智 司

特別講演 (16:10-17:10 第1室)

(司会) 安田女子大学准教授 田多良 俊 樹

講師： 県立広島大学名誉教授・元中国四国支部支部長 高橋 渡

演題：「文学論： 漱石・ジョイス・・・」

総会・閉会式 (17:20-18:00 第1室)

(司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長 島 克 也

総 会

閉会の辞

日本英文学会中国四国支部副支部長 水 野 和 穂

— 研 究 発 表 —

チョーサーの語彙の多用途検索ツールについて —— “A Chaucer Lexicon” の紹介 ——

呉工業高等専門学校助教 しゅう やく 周 躍

現時点で、チョーサーの単語を詳しく調べる際には、各辞書、グロッサリー、注釈書などを確認する複雑な作業が必要である。また、それらと同時に、写本や原典などの確認は専門的な研究ではない限り行う人が少なく、作品への理解が深まらないほか、ずれが生じる恐れもある。このような不十分な状況から抜け出すために、瞬時に単語の包括的な情報を提供できるコンピューター検索ツールが期待されている。本発表では、現在発表者が日本学術振興会の助成を受け、独自で構築中の“A Chaucer Lexicon”（以下「本ツール」と略称する）という検索ツールを紹介する。チョーサーの語彙を網羅的に収録したデータベースと言え、*OED*や*MED*などがあげられるが、全てが「定義→用例」式（各意味項目の下に例をあげる形式）であり、挙げられている用例の数が限られており、単語に複数の意味がある場合には各用例の意味候補を絞りにくいケースがしばしばある。このような背景をふまえ、本ツールは、「用例→定義」式を導入し、用例および作品本位で単語を一つずつ解釈し、独自のコメントを付けた上、対象の語が置かれる文脈の原典や韻律、訳などの外的情報および話者、話す相手などの内的要素に関する情報も同時に提供する。発表では、実演しながら、本ツールのコンテンツおよび機能を説明するほか、実例を用いて本ツールがどのように作品解釈に貢献できるかも紹介していく。

『パミラ』における発話と思考の提示法について

広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期 かどなが のぞみ 門永 望

書簡体小説は、登場人物自身が見聞きし、体験したものを自らの手で手紙という形式に再構築し、それを連ねることによって物語を進める手法を取る小説である。したがって、一人称で語られる。そのため手紙を書いている書き手と、過去に実際に何かを体験した書き手を峻別する必要性が生じ、書簡体小説は一人称の限られた範囲の中で語られつつも、書き手の“I”（“narrating self”）と過去の物事を体験した“I”（“experiencing self”）との間にそれぞれ異なった話法上の機能が存在すると考えられる。また、書き手と受け手との間にも時差が生じるため、実際の心情を手紙で伝えるとなると話法の提示法に関して工夫と技術が必要になる。書簡体形式を用いて登場人物の心情を描き、イギリス小説の先駆けとなったのがリチャードソンである。

本発表では、Semino and Short (2004) の話法に関するモデルを援用しながら、リチャードソンの『パミラ』の発話と思考の提示法について考察する。全32通の手紙から構成された本作品には、パミラとその両親、あるいは両親以外の他人との手紙のやり取りが描かれる。それらの手紙の中では、主人公パミラの心情を表すための多様な発話と思考の提示法が混在することを確認する。

*Jacob's Room*における意識の流れ技法の文体的転換の特徴：
不定代名詞 *one* と引用符の使用に関する一考察

島根大学特任講師 あさか 浅香 かなこ 加奈子

Jacob's Room (1922)は *Night and Day* (1919)と *Mrs. Dalloway* (1925)の間に出版された長編作品である。直前の *Night and Day* の文体は“traditional”と言われており、物語内の情景や登場人物の描写、直接話法を使う登場人物同士の会話表現を中心として構成されている。一方、直後に出版された *Mrs. Dalloway* では自由間接話法を中心とする意識の流れ技法の完成と言われており、思考表現を主に描出している。*Jacob's Room* はこれらの長編作品の間にあって、その文体には前後の作品に共通しながらも、転換点の作品としての変化の特徴がある。ウルフの意識の流れ技法を言語学的に考察する上で *Jacob's Room* における文体的特徴を分析することは重要である。

Jacob's Room にある前後の長編作品との共通点および変化は不定代名詞 *one* の使用である。不定代名詞 *one* は、*Night and Day* でも同程度の使用はあったが、登場人物の発話の一部として直接話法で使用されることが主である。一方、*Jacob's Room* では語り手や間接思考、視点が登場人物と語り手で定まらないなどの形式での *one* が多く、思考表現における不定代名詞 *one* の役割を考察する上で、後の *Mrs. Dalloway* での意識の流れ技法に発展する特徴の一つとしての重要性を見ることができる。

また、引用符は、先の *Night and Day* と比較すると登場人物同士の会話の減少もあり、*Jacob's Room* では直接話法の減少が予測される。後の *Mrs. Dalloway* では引用符の使用が少ないことも指摘されているが、その点についても *Jacob's Room* ですでに傾向があったとして、この作品での引用符の使用について検証し、ウルフの文体的推移を考察する。

老水夫に架かる虹
—コウルリッジの「老水夫行」における海蛇

徳島文理大学専任講師 かなざわ 金澤 ともり 朋紀

サミュエル・テイラー・コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) のバラッド「老水夫行」(“The Rime of the Ancient Mariner”)において、アホウドリ殺しによって呪われた老水夫は、海蛇を祝福することにより、その呪いから解放される。救済の契機となった海蛇は、本作品における中心的なシンボルである。この海蛇について、コウルリッジが渉猟した文献との関連がこれまでに研究されてきた。本発表は、旧約聖書の創世記における虹に着目し、「老水夫行」の海蛇の新たな解釈を指摘することで、作品における虹の聖書的表象を検討することにある。

創世記に描かれる虹、すなわち神と人間との間に交わされた契約を示す虹に、コウルリッジは関心を寄せる。この点を踏まえるとき、「老水夫行」の海を泳ぐ極彩色の蛇は、ひとり彷徨う老水夫の心に、神の存在を想起させ、約束する虹となる。さらにコウルリッジは、虹について思索を巡らせるとき、“foot”という表現を繰り返し用いて、橋を架ける虹の袂に注目する。「虹は、私の庭から教会へと架かっていた」と『ノートブック』(*The Notebooks*)に書き留めるコウルリッジは、「老水夫行」において老水夫を最終的に、教会へと向かわせる。老水夫が辿ってきた航路そのものこそ、老水夫と教会を繋ぐ虹に他ならない。海蛇を中心に「老水夫行」に重層的に架かる虹は、信仰の軌跡であると示すことが、本発表の目的である。

ノスタルジアの世界——Katherine Mansfield の *The Aloe*

高知大学教授 そう ひろし
宗 洋

来年 2023 年はキャサリン・マンスフィールド (1888-1923) にとって没後 100 年という節目の年に当たる。短編の名手という歴史的評価を得たマンスフィールドには生前発表することのなかった『アロエ』という長編小説がある。マンスフィールドは 1915 年から翌 16 年 3 月の間に『アロエ』を執筆したが、完成後に大幅な削除と修正を施して 1918 年にホガース・プレスから『プレリュード』というかたちで出版し、その後『幸福、その他』(1920)にそれを所収した。夫であり文芸批評家のジョン・ミドルトン・マリーが 1930 年に『アロエ』を編集して死後出版するが、他の作品とは扱いも異なり、長らく作品集や全集に入れられることもなかった。しかし、『アロエ』は生前に出版されなかったものの、というよりも、逆説的には出版されなかったがゆえに、マンスフィールドの作家としてのキャリアを考えるうえで重要な作品とも言える。

本発表では、『アロエ』が出版されなかった理由を追いつつ、その後の「プレリュード」や「入り江にて」といったニューージーランドものの名作の特徴となるノスタルジアの表現が、どのようなかたちで『アロエ』のなかに芽吹いているのかを作品の構成と文体の面から考える。

「装飾農園」の継承とロマン派

和歌山大学教授 いまむら たかお
今村 隆男

18 世紀始めにアディソンが『スペクテイター』において示した、庭園における美と生産性の融合という理想は、農業を庭園内に組み込んだ「装飾農園(Ferme Omée)」を生んだが、その最初の典型例と言われているのが 1734 年からサウスコートが造園したウーバーン(Woburn)である。その後、「装飾農園」を含む風景庭園の隆盛の時代を経て、18 世紀末からのロマン派の時代になると人口増や農業国フランスとの対立が国内農業の重要性を増大させ、近代科学などの影響も加わってイギリスの農園は変質を余儀なくされることになる。その中で「装飾農園」は時代遅れになってゆき、それに代わって「模範農園(Model Farm)」と呼ばれる新しい農園形態が登場する。次のビクトリア時代にはいと農園は機械化、効率化を通して近代化するが、一方で農園と美との結びつきは完全に失われたのではなかったと考えられる。本発表では、農業や庭園史の転換期であったロマン派の時代を中心に、ウーバーンに始まる「装飾農園」の遺産がどのように継承されていったのかを関連文献の中に探してみたい。

キャサリン・バークリーの死因検証 — 『武器よさらば』における法の問題—

広島大学大学院生 もりかね ひろと
森兼 寛登

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の第三長編『武器よさらば』 (*A Farewell to Arms*, 1929) の結末において、主人公フレデリック・ヘンリーは恋人キャサリン・バークリーを産褥死によって失う。小説の最後にキャサリンがなぜ亡くなるのかという問題は、少なからぬ批評家の関心を集め、伝記研究、自然主義、戦争といった枠組みから、様々な解釈がなされてきた。本発表は、イタリア軍を逸脱したフレデリックが「学校をずる休みする生徒」に喩えられる場面などに表れる作中の「法」のイメージに着目し、それを作品が執筆された同時代的文脈から検討する。1922年の「ローマ進軍」を皮切りにイタリア国内で勢力を拡大していったイタリア・ファシズムは古代ローマ帝国を神聖化し、自らをその後継と位置付けた。また、ファシスト体制が力による支配を推進する中で古代ローマ帝国の「法」と「規律」の概念を積極的に利用したことも知られている。発表者は、『武器よさらば』における「法」表象が多分にこうした歴史的な文脈を踏まえたものであることを検証しつつ、イタリアの「法」の影響力が国境を越え、キャサリンの帝王切開が行われるスイス・ローザンヌの病院の手術室に顕現し、逸脱者となったフレデリックとキャサリンを罰することを論証する。

ミステリアス・ギャツビー

— 『グレート・ギャツビー』におけるギャツビーの身体的特徴の欠如—

広島商船高等専門学校講師 いけだ さちえ
池田 幸恵

F. スコット・フィッツジェラルドによる『グレート・ギャツビー』 (1925) の主人公ギャツビーの姿を思い描く時、多くの読者は白色やピンク色のスーツを着た姿を思い浮かべるだろう。これらのスーツ姿は間違いなく強烈な印象を読者に与えている。しかしながら、ギャツビーの身体的特徴についてはどうであろうか。ギャツビーの身長、体重、体格、瞳、髪、肌の毛、肌といった身体的特徴を思い浮かべるのは困難であろう。ギャツビーの身体的特徴は他の登場人物と比べても奇妙なほどに欠落している。この欠落については執筆当時、担当編集者であったパーキンスにも指摘されており、身体的特徴を付け加えるよう助言されていたが、フィッツジェラルドはそれに従うことはなかった。

本発表では、ギャツビーの身体的特徴の欠如の問題について階級と人種の観点から考察する。これまでの研究では、ギャツビーの曖昧さやミステリアスさは彼を1920年代のアメリカという現実の場所と時間から切り離し、神話化するためのものだとして解釈されてきた。しかし、フィッツジェラルドが「ジャズ・エイジの桂冠詩人」と呼ばれ、時代を鮮明に描いてきた作家であることを考慮すれば、本作品やギャツビーという人物にも時代が描かれていると捉えるべきであろう。ギャツビーの身体的特徴の欠如を通して、フィッツジェラルドがいかにして1920年代のアメリカが直面する階級と人種の問題を描いたかを検討する。

コーマック・マッカーシーとウィリアム・フォークナー
——『ブラッド・メリディアン』におけるアメリカ南部の人種差別的暴力の越境

広島大学教授 おおち しんすけ
大地 真介

コーマック・マッカーシーは、ウィリアム・フォークナーを代表とするアメリカ南部の作家たちによる南部ゴシックの流れをくむ作家であり、多くの作品で陰惨な南部を描いてきた。ジョン・バートやジョナサン・ヤードリーは、フォークナーの影響を最も受けた南部作家はマッカーシーかもしれないと述べており、実際、マッカーシーの作品とフォークナーの作品の類似点は数多く指摘されている。ただし、2016年に出版されたフレッド・ホブソンとバーバラ・ラッドが編集した600ページ近くの大著である *The Oxford Handbook of the Literature of the U.S. South* ではマッカーシーは全く言及されておらず、南部作家ではないかのような扱いである。バートは、マッカーシーが中期以降の作品ではフォークナーから遠ざかっていると主張し、マーティン・ボーンも、マッカーシーが、『ブラッド・メリディアン』、国境三部作、『老人の住む国にあらず』の舞台を深南部からテキサスに移すことによって、フォークナーの影響から解放されたと述べているが、ことはそう単純ではない。本発表では、バートやボーンたちが唱える定説と違ってマッカーシーが中期の作品以降もフォークナーからの影響を保持していることを、特に『ブラッド・メリディアン』に着目して指摘したい。

進行形に投影される含意構造と世界像
——「表象」と「アレンジメント」の言語ゲーム——

秀明大学教授 ひさべ かずひこ
久部 和彦

進行形の言語ゲームが包摂する「調整済の意識」の含意と心理上の進行開始という「黙示の効力」を英語教育上も「意識的に」理解させ、その捕捉力養成に関わる言語指導サンプルの説明力と論理構造を探究する。具体的には、黙示と含意が「前提」とされたタイプの進行形の言語ゲームと、そうでない眼前する指示対象との「突合せ」を有した進行形の言語ゲームとの差異や類似性を考察し、「双方を織り合わせた理解力」を教育することにより、外延の広い進行形の世界像の修正が教育的に可能となるか否かを論じる。また、進行が連続しない進行形、進行を有する現在形、認識の行き渡りを条件に成立する進行開始前の進行形等に関しては、ヴィトゲンシュタイン的な「記述の束的シャッフル」を事前認識として附与することにより、使用力の幅の形成に変化がみられるか否かについても論じたい。特に、進行概念パレットの意識化の「後では」、概念使用力の形成に関して、「自動再編力」というアダム・スミスの「見えざる手」が反応力を高めるという試論にも触れたい。その他、非言語と言語の狭間に漂う断片的サイン・ランゲージ等を組み合わせた「表象」のリメイク、「アレンジメント」の成立条件が黙示的なサインや「表情」の解釈等をも取り込む「合成性」を包括しうるか否かについても考察する。「アレンジメントの形成力」を意識的に「展望」する訓練により、進行概念の認識ゾーンが脱構築されうることを示す。

批判的視点から「異文化理解」を捉え直す

大島商船高等専門学校助教 なかはら みずき
中原 瑞公

本発表の目的は、日本の英語教育において自明視されている「異文化理解」言説を批判的に問い直すことである。特に、本発表では、「多様性の尊重」や「寛容の態度」など、リベラル多文化主義のことばを用いて語られる「異文化理解」言説の問題点を論じる。具体的には、(1) 好ましい「文化」と好ましくない「文化」の選別、(2) 本質化による「文化」の排除、(3) 「異文化」に対する自らの特権への無自覚、(4) 構造的問題の隠蔽、の4点に言及する。本発表を通して、日本の英語教育における「異文化理解」は、「文化」を取り巻く差別や不平等の生産と再生産に加担しているかもしれないことを示す。

結論部では、リベラル多文化主義にもとづく「異文化理解」の限界を乗り越えるため、批判的多文化主義および批判的多文化教育の理念にもとづく「異文化理解」の必要性を論じる。加えて、批判的研究の一環として「異文化理解」を研究していくことの意義についても述べる。

日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の側頭葉近辺の賦活状況： 英語説明文読解と日本語詩読解との比較を通して

にしはら たかゆき
広島大学准教授 西原 貴之

本発表では、近赤外分光法による脳機能計測装置を用いて、中～上級日本人大学生英語学習者の英語詩読解時の大脳新皮質の賦活（側頭葉近辺左右各10箇所）について、日本語詩読解時と英語説明文読解時の賦活と比較する中で、その特徴を調査した結果を報告する。分析の結果、(a) 日本語詩読解時と英語説明文読解時よりも英語詩読解時の方が賦活が高い傾向が見られた（ただし、統計的有意差が検出された箇所は極めて限られていた）。また、文章理解の自信の度合い（読解の主観的難しさ）も尋ねたところ、(b) 英語説明文読解に比べて日本語詩読解と英語詩読解では自信の度合いが低く、かつ (c) 日本語詩読解と英語詩読解では自信の高さは同程度であった。つまり、(e) 英語詩読解と英語説明文読解ではより難しい（自信がない）と感じた英語詩読解時の方が脳の賦活が高くなる傾向が見られたのに対して、(f) 難しさの程度に違いがなかった（自信の程度が同程度であった）英語詩読解と日本語詩読解では、英語詩読解時の値が高くなる傾向が見られた。以上の調査結果報告に加えて、近赤外分光法を使った別の調査（西原貴之(2015)。「日本人大学生英語学習者の英語詩読解中の脳の賦活状況：近赤外分光法(NIRS)を用いて」、『第87回大会 Proceedings : The 87th General Meeting of The English Literary Society of Japan, 23-24 May 2015 (付 2014年度支部大会 Proceedings)』(pp.29-30). 日本英文学会。)と結果の比較を行い、英語詩読解研究の今後の課題についても考えてみたい。

— シンポジウム —

デジタル時代の英語英米文学研究と英語教育 ——デジタル・ヒューマニティーズの有用性と可能性を考える

(モデレーター) 広島大学教授 いまはやし おさむ 今林 修

デジタル・ヒューマニティーズは、哲学、史学、文学に代表される人文学をその対象とし、それらをデジタル化する過程での手法やその本質的な意義を問い、さらには人文学の研究手法に新しい視点を提供しうる学際的な研究分野であるといえる。

本シンポジウムの趣旨は、日本英文学会中国四国支部の会員諸氏の研究分野である英米文学、英語学、英語教育学に、デジタル・ヒューマニティーズの知見がいかに関与でき、またどんな恩恵をもたらすのかを考える機会を共有し、デジタル時代の英語英米文学研究と英語教育におけるデジタル・ヒューマニティーズの有用性と可能性を探ることにある。デジタル時代における日本語文化圏の人文学から英文学への期待に耳を傾け、英米文学研究から音声認識 AI 技術将来像を見つめ、ユーザ視点から研究と教育におけるデジタル・ヒューマニティーズの活用法とそのアウトリーチ活動を議論し、デジタル・ヒューマニティーズの手法を用いた「精読」ならぬ「遠読」の実践を皆様と一緒に考えたい。

デジタル時代の日本語文化圏の人文学が英文学に期待すること

(講師) 一般財団法人人文情報学研究所主席研究員 ながさき きよりの 永崎 研宣

デジタル媒体がインフラ化するにつれて、我々の様々な営為はデジタルネットワークに移行しつつあり、日本語文化圏で人文学に携わる我々はまさにその只中にある。この立場からデジタル時代に対応していくためには、やはり先例を参照したい。

英語を公用語とする諸国では文学研究がその先陣を切っているようであり、シェイクスピアの諸作品や『カンタベリー物語』など、デジタル技術を活用した教育研究が花盛りである。しかし、筆者のように英文学を修めていない者にとっては、デジタル技術を使用して何かをしている部分だけは理解できても、それによって何が興味深く、どのようにして深い研究やさらに面白い教育内容に接続していくか、といった本来の醍醐味となる部分がまったくわからない。筆者は仏教学研究としてデジタル技術活用の深みを同業者に説明する機会を持つことがあるが、その時に感じる方法論的発展可能性への深い共感に基づく頷きや目配せ、これは英文学が素材であるなら英文学研究者同士でなければ得られないものだろう。そのようにして、世界の最先端たる英語圏での英文学研究のデジタル・ヒューマニティーズの教育研究の動向を、皆様に共通理解を持っていただき、その面白さの部分日本語文化圏の人文学に還元していただけたなら、日本語圏の人文学全体への多大な貢献になる。これは一人で取り組むことは困難だが、一人で取り組む必要はまったくない。ぜひ皆様のお力を結集して、面白いと思われたところを伝えていただければ幸いである。

Zora Neale Hurston が音声認識 AI 技術をつくったら？

(講師) シンガポール工科大学助教授 よこやま 横山 せつこ 説子

皆さんはオンライン会議に英語で参加された際、ご自身の発言が聴覚障がいがある方のための字幕 (closed captioning) に、正確に反映されない経験をされたことがあるでしょうか。私はこの様な現状には、技術的な要因だけでなく、英語の社会政治史も反映していると考えています。

例えば、アメリカ人作家で民俗学者の Zora Neale Hurston は、自身の故郷・アメリカ南部の地方に暮らす黒人系住民の生活を、鮮やかに描いた文学作品でよく知られています。また Hurston は、黒人英語は口承文化の豊さの象徴であること、それを文字で表現するにはどのような綴りがふさわしいかなど (例：一人称は“I”ではなくて“Ah”)、独自の民俗学フィールドワーク方法と文学編集論をエッセイに書き残しています。Hurston の黒人英語表記法はまた、ニュー・ディール政策の一環で民間伝承収集のためにフロリダ州で雇われた多くの作家に愛用されました。しかし、このように黒人英語で作成された民間伝承資料は、連邦政府によって英語の綴りが不適切として検閲の対象となりました。

AI を活用した自動文字起こし技術 (speech-to-text technology) によって、英語の一人称は“I”と表記することが今日「当たり前」とされているのには、このような白人中産階級社会への同化政策の歴史の影響もあるでしょう。英文学研究とデジタル技術批評の交差点から構造的差別に立ち向かうことで、どのような音声認識 AI 技術将来像が浮かび上がるのでしょうか。

ユーザ視点のデジタル・ヒューマニティーズ——研究、教育、アウトリーチ

(講師) 武蔵大学准教授 きたむら 北村 さえ 紗衣

デジタル・ヒューマニティーズ研究は学際的な枠組みで多くの成果を上げている研究分野である。学会でもしばしばデジタル・ヒューマニティーズを主題とするセッションが組まれる。こうしたセッションにおいて登壇するのは通常、デジタル・ヒューマニティーズを専門分野とする研究者であり、議論が専門的なものになることも少なくない。

本発表はこうした専門的なセッションにユーザの視点を導入しようとするものである。発表者はデジタル・ヒューマニティーズの研究者ではないが、研究・教育でしばしばデジタルツールを利用しており、またアウトリーチの一環として日本語版ウィキペディアでも活動している。この発表では、本セッションにおける専門家の発表に対する応答のような形で、非専門家であるユーザとしての研究者がデジタル・ヒューマニティーズ研究をどのように活用できるのか、またどのように貢献できるのかを検討する。

本発表は3つの論点を議論する。最初の論点としては、日々増えていくデジタルツールにユーザとしての研究者がどう対応できるかを考えたい。ふたつめの論点としては、教育へのデジタルツール導入をとりあげる。最後の論点として、ウィキペディアをはじめとするアウトリーチ活動においてデジタル・ヒューマニティーズ研究はどのような影響を及ぼしているかを指摘したい。

確率論的トピックモデリングによる *British classic fiction* の「遠読」

(講師) 大阪大学教授 たばた 田畑 ともじ 智司

この20年あまりの自然言語処理技術の進展はめざましく、特に、ことばのデータに「意味」の観点からアプローチする手法が考案されてきた。その一つが、Blei (2012)による確率論的トピックモデリングである。トピックモデリングは、機械学習のアルゴリズムにより、コーパスを構成する文書において繰り返し共起する確率が高い語群を発見する手法である。従来、コンピュータを用いた言語データの分析では、意味の問題を扱うことは極めてチャレンジングな課題であり、意味へのアプローチは事実上忌避されてきたと言ってよいだろう。そのため、コーパスに潜在する意味構造を可視化するトピックモデリングの出現は福音であり、この技術はデジタルヒューマニティーズ (DH) において積極的に取り入れられ、トピックモデリングはある意味、「DHの提喻」(Weingart, 2013) となっている感がある。

本シンポジウムでは、トピックモデリングを18、19世紀の代表的散文作品からなる *British classic fiction* コーパスに適用したパイロットスタディを提示し、この手法を通して多数の作品テキストを横断的にトピックを探索するという、「遠読」を実践することにより、作品間の系統関係やテキストの意味的類型分類などが可能になることを紹介する。このアプローチが、データとしてのテキストをさらに質的に深掘りするための鉱脈の発見へと繋がること、そして文学研究や文体論研究に新たなタイプの実証的データを提供しうることを示したいと思う。